

18歳意識調査 「第75回 -クマ被害-」 報告書

日本財団 2026年1月28日

目次

内容	ページ
調査概要	3
クマによる被害の状況	5
人間の生活圏に出没したクマへの対応に関する意見	6
人間の生活圏に出没したクマへの対応を考えるうえで重視した観点	7
クマの出没数増加の背景	9
クマの出没数増加に対する人間の責任	10
クマ駆除の担い手の減少・不足	12
これからのクマ駆除の中心となるべき組織	13
クマを駆除した自治体に対する苦情	14
クマを駆除した自治体に対する苦情への印象	15
クマを含む獣害や遭遇時の安全対策についての教育	17
クマ被害防止の政策として期待するもの	19

第75回18歳意識調査「クマ被害」 調査概要

調査対象

全国の17歳～19歳男女

回答数

1,000

※性年齢別の人団比率に合わせ、下記の通り割り付けを実施。

	17歳	18歳	19歳	計
男	169	169	175	513
女	160	161	166	487
計	329	330	341	1,000

実施期間

2025年 12月26日（金）～ 12月28日(日)

調査手法

インターネット調査

注記1：回答者がインターネット利用者に限られるなど、回答者に何らかの偏りが生じる可能性があり、必ずしも日本全体の17～19歳男女に妥当するものではない。

注記2：本編の図表の数値は、小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100%とはならない。

提示文章①

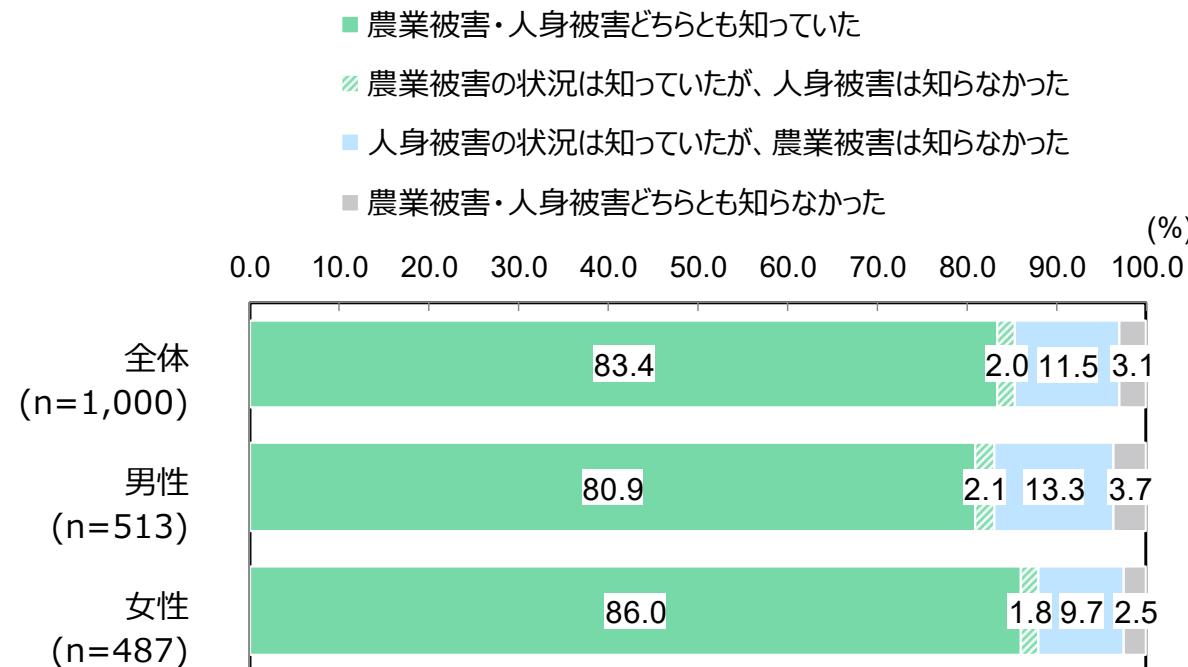
2025年は新語・流行語大賞に「緊急銃猟／クマ被害」がTOP10入りするなど、クマによる農作物・家畜・人身被害が全国的に急増し、過去最悪のレベルと言われました。山間部以外に市街地や住宅地にもクマが出没し、農家の果樹園や畑だけでなく通学路や公園でも被害が発生しました。政府も閣僚会議を開いて「クマ被害対策パッケージ」を打ち出し、警察によるクマ駆除の許可や駆除支援のための自衛隊派遣も大きな話題になりました。クマの生息域が全国的に広がり、個体数が過去30年間で2倍に増えたとの推計もあり、今後、一層大きな問題になると予想されます。このような背景から、クマ被害やクマ駆除に関する皆さんの意識を把握するため本調査を実施しています。

クマによる農業被害は、2023年度で約7億円となっており、2025年度にかけて増加傾向にあります。また2025年度の人身被害は11月時点で過去最多の230人（うち死者数13人）となっています。

クマによる被害の状況

「クマによる被害の状況」について、全体の80%強が「農業被害・人身被害どちらとも知っていた」と回答した。

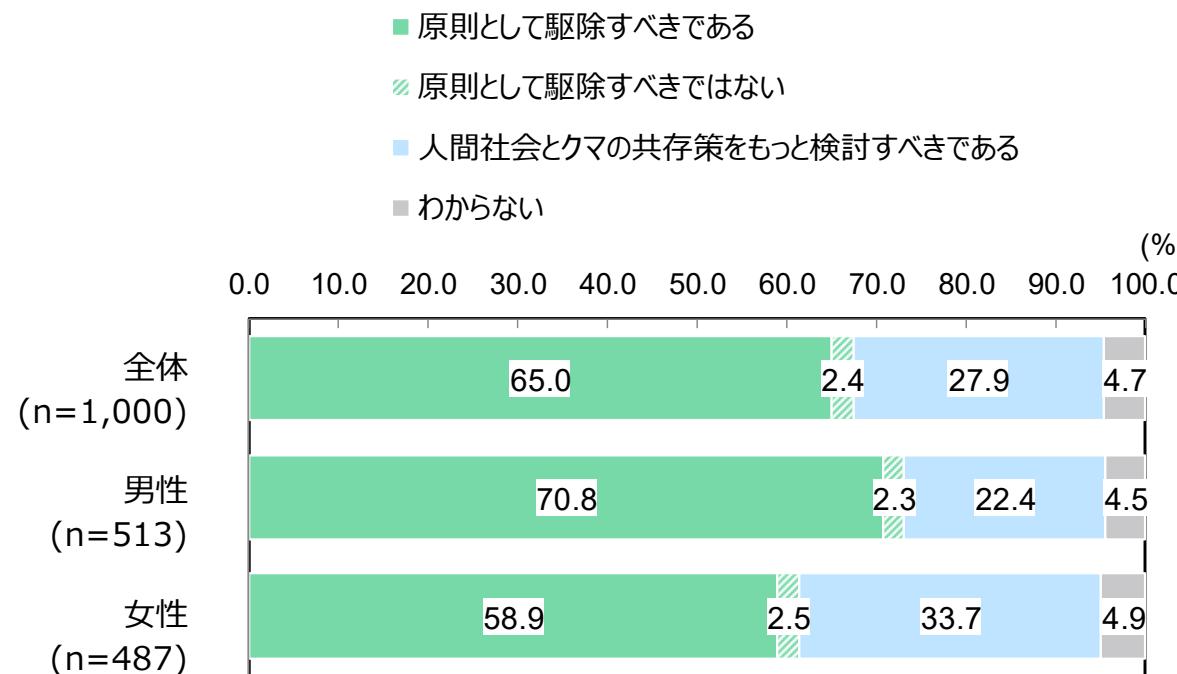
質問2：クマによる農業被害・人身被害の状況について知っていましたか。（単一回答）



人間の生活圏に出没したクマへの対応 に関する意見

「人間の生活圏に出没したクマへの対応」について、約70%の男性が「原則として駆除すべきである」と回答し、女性より11.9pt多かった。男性で「人間社会とクマの共存策をもっと検討すべきである」との回答は20%強にとどまったが、女性では同項目を30%強が選択し、男女差は11.3ptとなった。

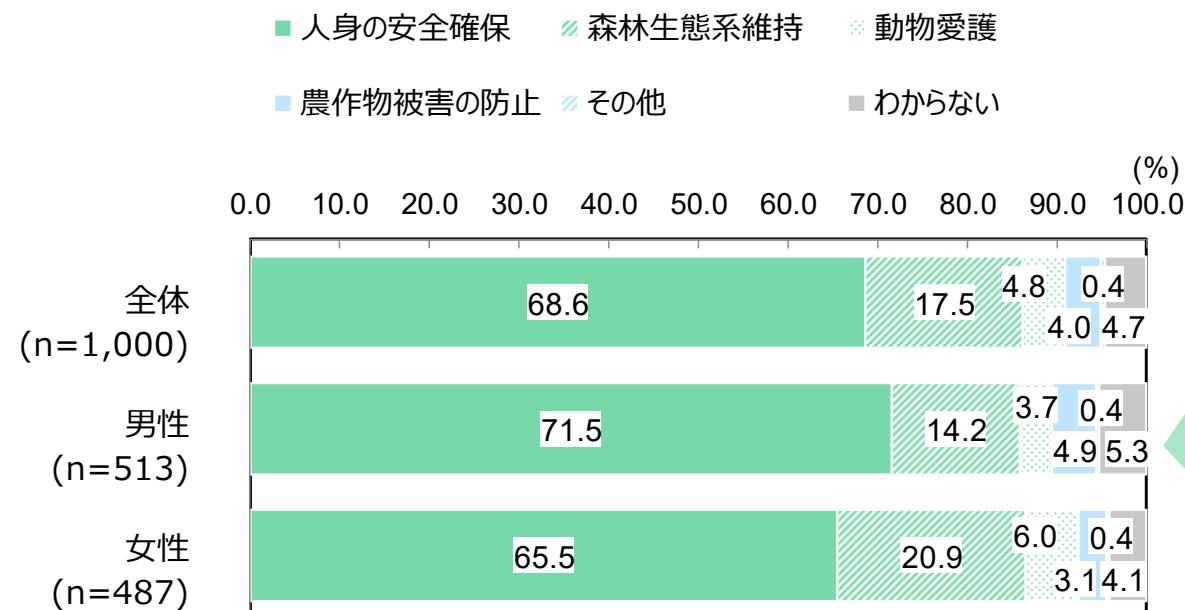
質問3：人間の生活圏に出没したクマは農業被害・人身被害防止のため駆除されています。
人間の生活圏に出没したクマへの対応で、お考えに最も近いものを選んでください。（単一回答）



人間の生活圏に出没したクマへの対応 を考えるうえで重視した観点

「人間の生活圏に出没したクマへの対応」に回答するうえで重視した観点として、「人身の安全確保」が最も多く、全体の70%弱が選択した。「森林生態系維持」が次に多く、全体の20%弱が選択した。

質問4：前問「人間の生活圏に出没したクマへの対応」に回答するうえで、あなたが最も重視した観点を1つ選んでください。（単一回答）



「その他」の自由記述

- ・ 人身の安全確保をした上で、共生の道がないか探ること
- ・ 弱肉強食。生態ピラミッドで上の種族に喧嘩を売って負けるのは自然の摂理
- ・ 熊も人に被害を与えてしまうのは可哀想だし、人が農作物の被害を受けるのも可哀想だから
- ・ そうあるのが自然だと思ったから

※「その他」「わからない」を除き、
全体の降順で掲載。

提示文章②

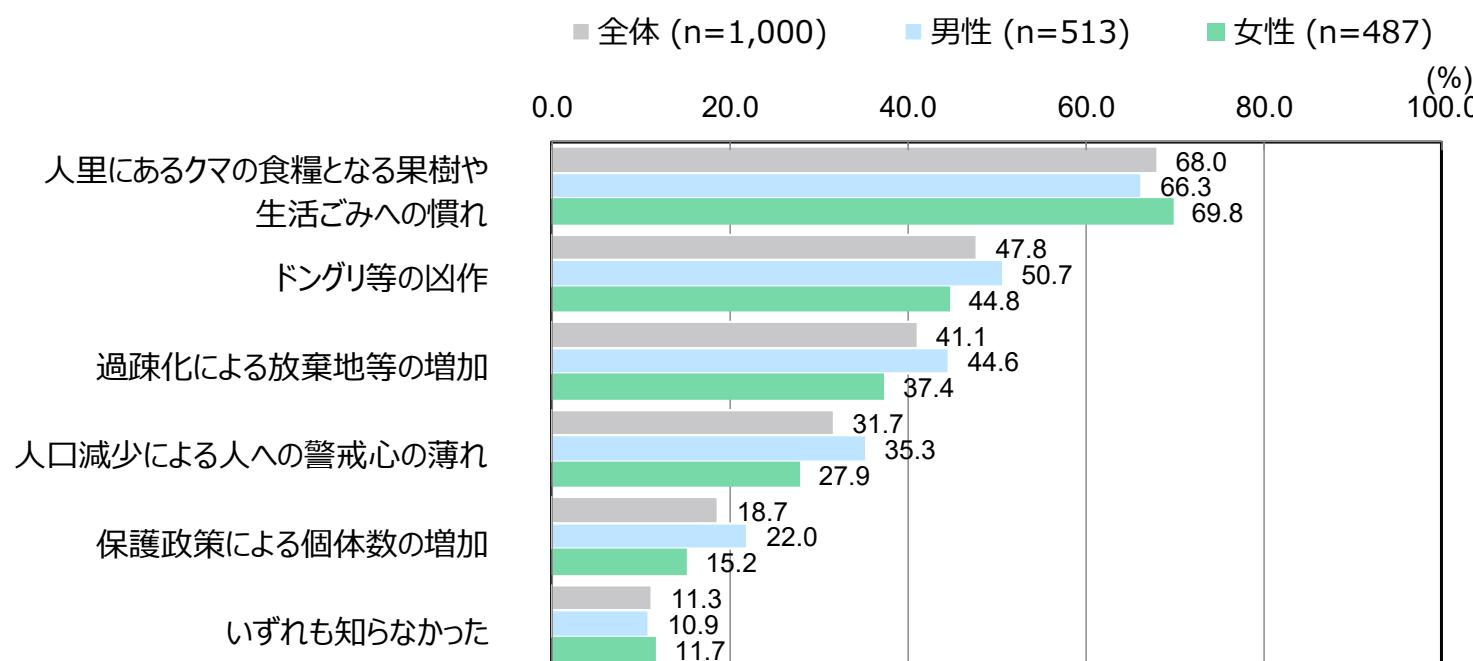
次にクマの出没数増加についてお聞きします。クマの出没数が増加した背景には、主に以下の5つがあると言われています。

- ① クマの主食であるドングリ・堅果類が凶作だった
- ② 人口減少に伴い森林内で人間に追われる機会が減った結果、人への警戒心が薄れている
- ③ 過疎化によって管理不足の里山が増加したほか耕作放棄地がクマの生育に適した環境に変化しつつある
- ④ 鳥獣保護管理法などクマ保護政策により生育数が回復・増加している
(ヒグマ：推計12,000頭以上、ツキノワグマ：推計42,000頭以上)
- ⑤ カキや栗などの果樹、生活ごみ・残飯など、人里に食糧があることに慣れてきている

クマの出没数増加の背景

「クマ出没数増加の背景で知っていたもの」として、「人里にあるクマの食糧となる果樹や生活ごみへの慣れ」が最も多く、全体の70%弱が選択した。「ドングリ等の凶作」が次に多く全体の50%弱が選択し、3番目に多かったのは、全体の40%強が選択した「過疎化による放棄地等の増加」であった。

質問5：クマの出没数が増えた背景について知っていましたか。知っていたものを全て選択してください。（複数回答）



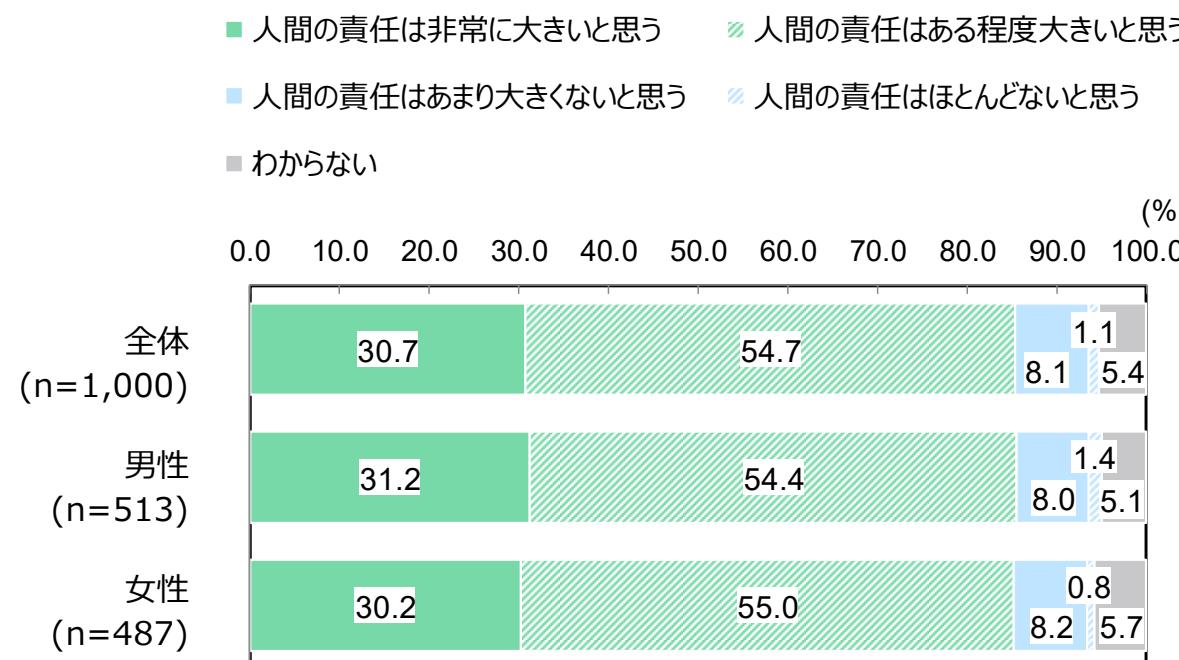
※「いずれも知らなかった」を除き、
全体の降順で掲載。

クマの出没数増加に対する人間の責任

「クマの出没数増加に対する人間の責任」について、全体の90%弱が「人間の責任は大きいと思う」（※）と回答した。

※「人間の責任は非常に大きいと思う」、「人間の責任はある程度大きいと思う」の合計。

質問6：クマの出没数増加に対する人間の責任について、あなたの考えに最も近いもの一つ選んでください。（単一回答）



提示文章③

次に、クマの駆除の担い手についてお聞きします。クマの駆除は猟友会など地域のハンター・マタギの人々が担ってきましたが、高齢化が進み、駆除可能な猟銃保持者は減少を続けています。そのため、警察や自衛隊が駆除に関わる事態も出てきました。そして、クマを駆除した自治体に対しては多くの苦情が寄せられ、行政の対応が萎縮する事態も懸念されています。

クマ駆除の担い手の減少・不足

「クマ駆除の担い手の減少・不足」について、全体の70%強が「高齢化という背景も含めて知っていた」、10%強が「知っていたが、高齢化が背景にあることは知らなかった」と回答した。

質問7：ハンターやマタギの高齢化が進み、クマ駆除の担い手が減少・不足していることを知っていましたか。（単一回答）

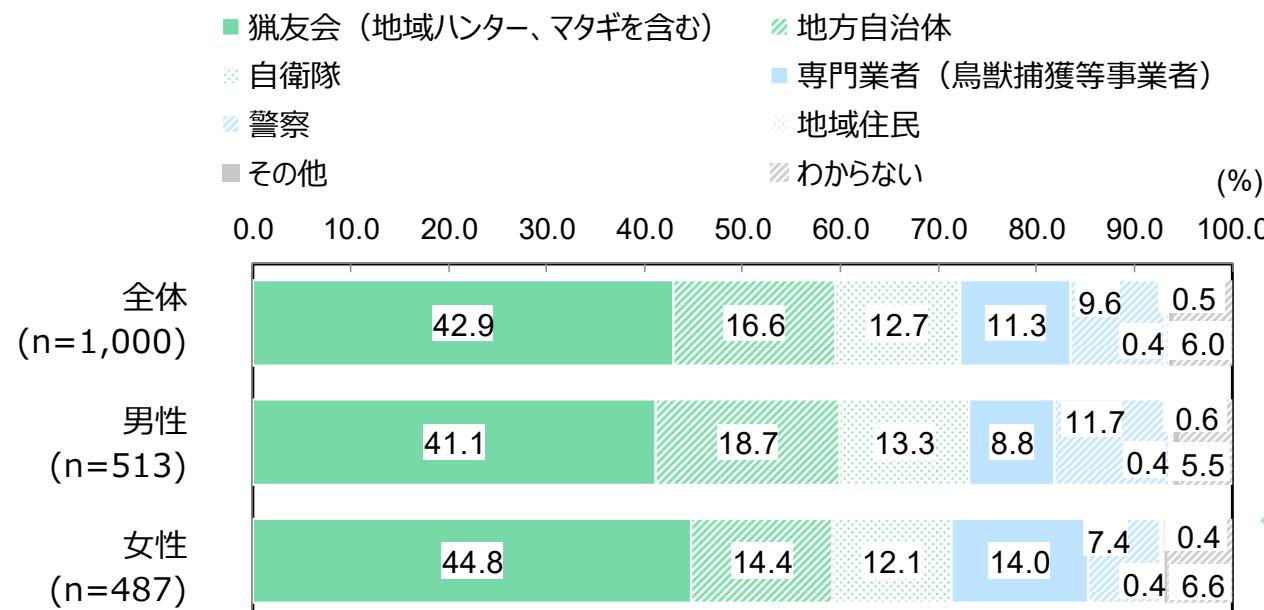
- 高齢化という背景も含めて駆除の担い手が減少・不足していることは知っていた
- 駆除の担い手が減少・不足していることは知っていたが、高齢化が背景にあることは知らなかった
- 駆除の担い手が減少・不足していること自体知らなかった（今回初めて知った）



これからのクマ駆除の中心となるべき組織

「これからのクマ駆除の中心となるべき組織」として、「猟友会（地域ハンター、マタギを含む）」が最も多く全体の40%強が選択し、「地方自治体」が次に多く全体の20%弱が選択した。3番目に多かったのは、全体の10%強が選択した「自衛隊」であった。

質問8：これからのクマ駆除の中心となるべき組織は何か、あなたの考えに最も近いもの教えてください。（単一回答）



「その他」の自由記述

- ・ クマ駆除の公務員をつくる
- ・ 国
- ・ 特定の組織が中心となるのではなく各組織が協力すべき
- ・ 駆除しないのを臨みたい

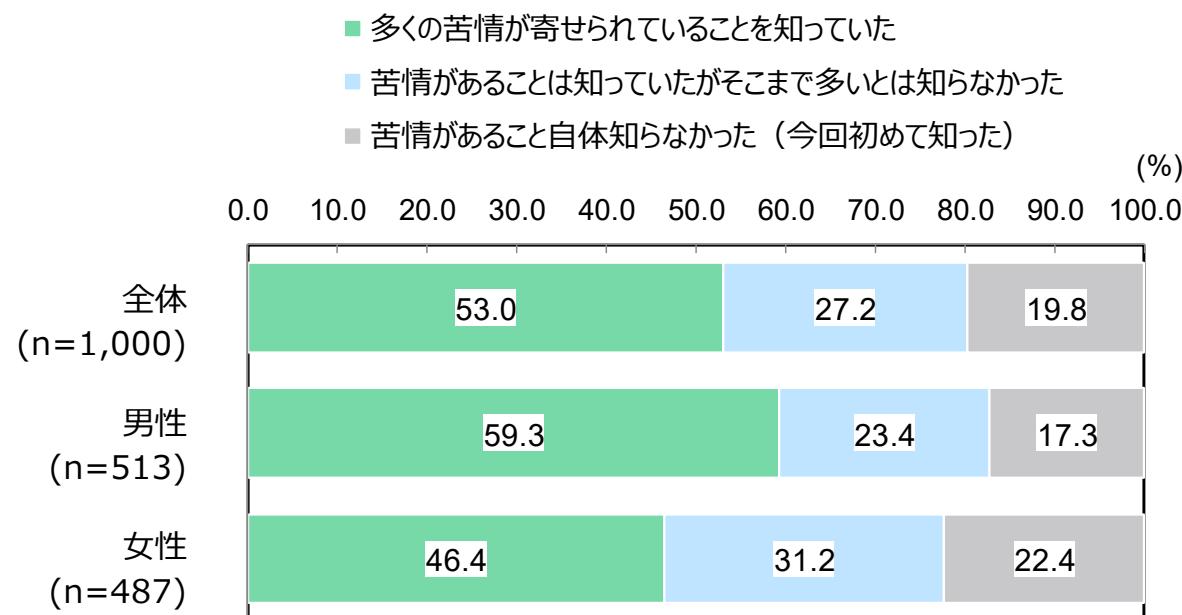
※「その他」「わからない」を除き、
全体の降順で掲載。

クマを駆除した自治体に対する苦情

「クマを駆除した自治体に対する苦情」について、全体の約80%が「苦情があることを知っていた」（※）と回答した。

※「多くの苦情が寄せられていることを知っていた」、「苦情があることは知っていたがそこまで多いとは知らなかった」の合計。

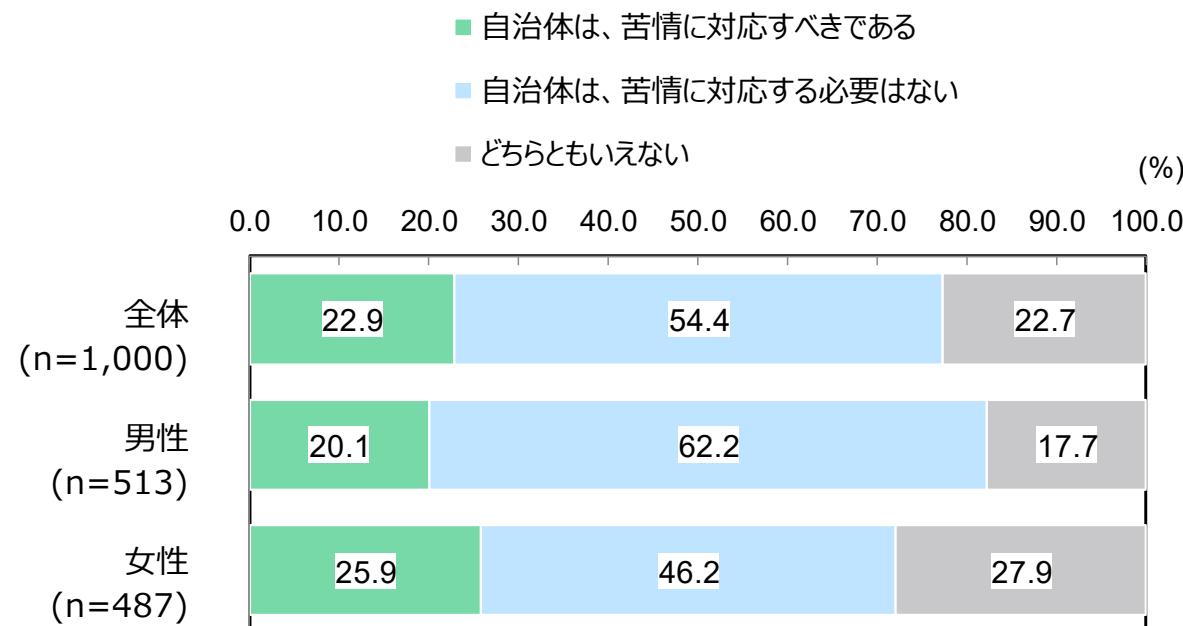
質問9：クマを駆除した自治体に対して多くの苦情が寄せられていることを知っていましたか。例えば2025年8月にクマを駆除した北海道の自治体に対しては、200件以上の苦情が寄せられました。（単一回答）



クマを駆除した自治体に対する苦情への印象

「クマを駆除した自治体に対する苦情への印象」について、60%強の男性が「自治体は、苦情に対応する必要はない」と回答し、女性より16.0pt多かった。男性で「自治体は、苦情に対応すべきである」との回答は約20%にとどまったが、女性では同項目を30%弱が選択し、男女差は5.8ptとなった。

質問10：クマを駆除した自治体への多くの苦情に対してどのような印象を持ちましたか。最も近いものを選んでください。（単一回答）



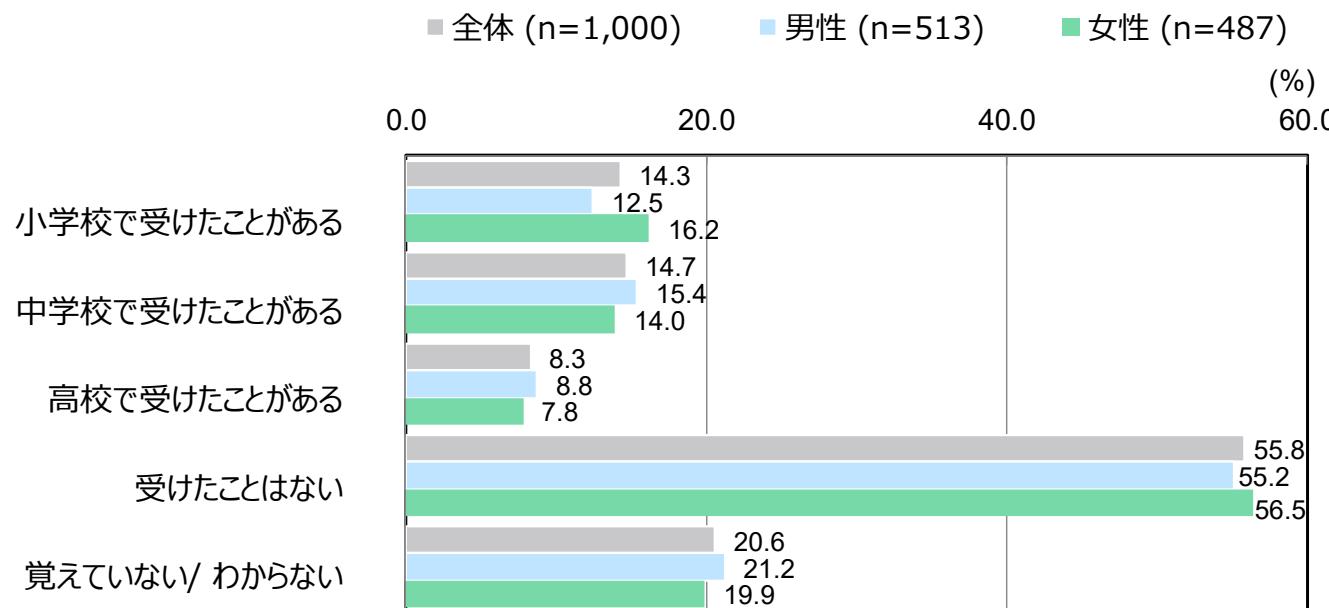
提示文章④

次に、クマを含む野生動物に関する教育についてお聞きします。

クマを含む獣害や遭遇時の安全対策についての教育

「クマを含む獣害や遭遇時の安全対策についての教育を受けた経験」について、全体の60%弱が「受けたことはない」と回答した。「小学校で受けたことがある」、「中学校で受けたことがある」との回答はいずれも全体の10%強にとどまり、「高校で受けたことがある」との回答は10%弱であった。

質問11：あなたは小学校・中学校・高校で、クマを含む野生動物による獣害や遭遇時の安全対策について授業等（学校が主催する社会科見学などを含む）を受けたことはありますか。あてはまるものを全て選んでください。（複数回答）



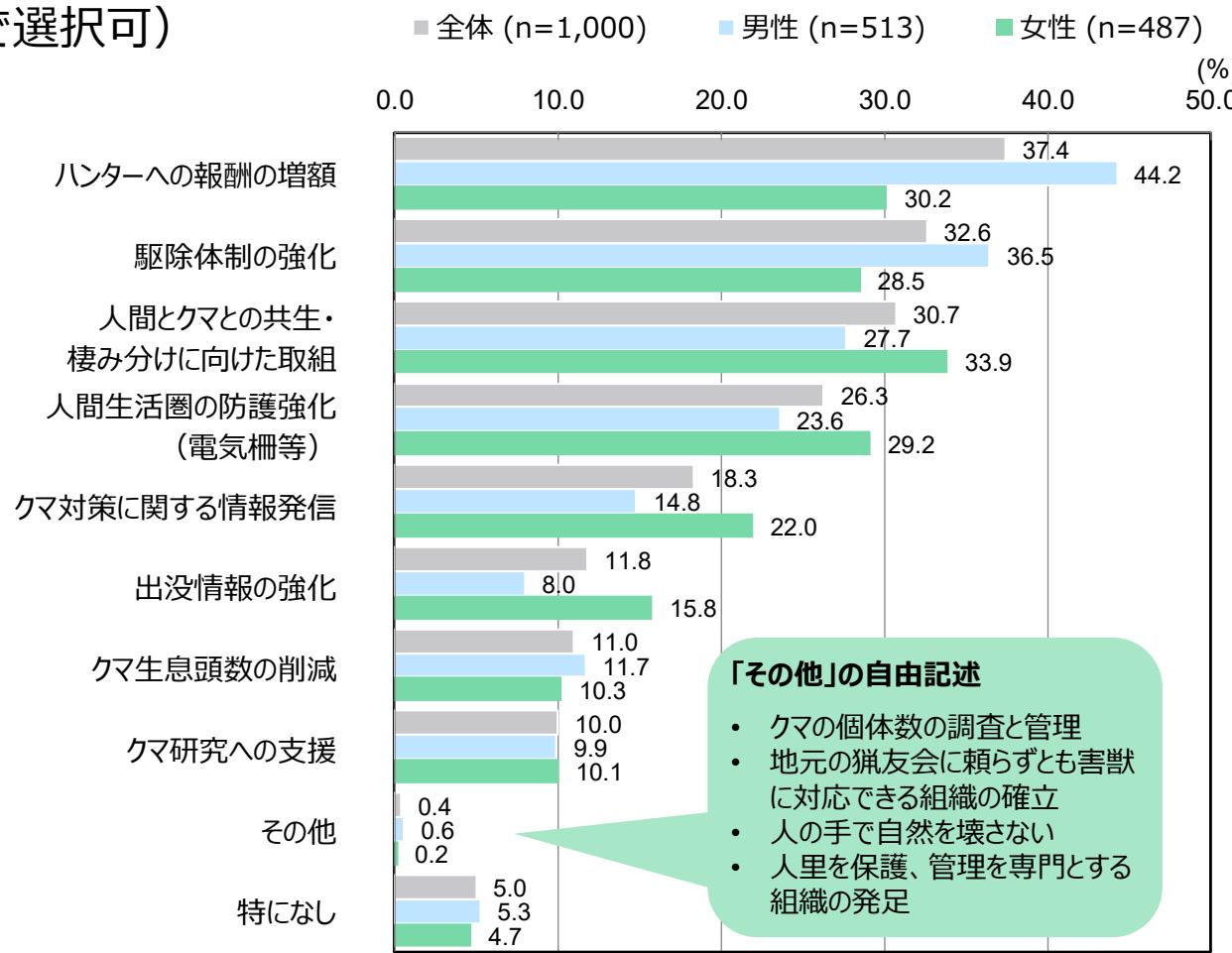
提示文章⑤

最後に、政府に求めるクマ対策についてお聞きします。

クマ被害防止の政策として期待するもの

「クマ被害防止の政策として期待するもの」について、男性は「ハンターへの報酬の増額」が40%強と最も多く、「駆除体制の強化」、「人間とクマとの共生・棲み分けに向けた取組」が続く。女性では「人間とクマとの共生・棲み分けに向けた取組」が30%弱で最も多く、「ハンターへの報酬の増額」、「人間生活圏の防護強化（電気柵等）」が続いた。

質問12：クマ被害防止に向けた政府の対策として特に期待するものを2つまで教えてください。
(2つまで選択可)



※「その他」「特になし」を除き、
全体の降順で掲載。